

川崎市大山街道「街なみのデザインコード」

景観条例に位置づけられた都市景観協議会を中心に前年度に策定された基準を補完する「大山街道街なみ作法集」を作成しました。

作法集では、地域が理想とする街並みの将来像やそれを実現するための手がかり（デザインコード）についてまとめ、強制力を持つ基準との両輪で、街並み形成を進める仕組みとしました。

4 大山街道の街なみ作法 ～おすすめデザイン～

大山街道では、現代的な街なみの魅力を高めながら、その中に、かつての歴史的な街道における街なみづくりの精神(和の心)を取り入れることにより、魅力的な街なみを目指したいと考えています。

大山街道の街なみ作法による街なみのイメージ

バルコニーを建物のフレームの中に組み込んで一体化することにより、外観を整えることができます。

マンションや事務所等の現代建築でも、高さや開口を分割化するることにより、昔ながらの日本人のスケール感に合った秩序ある街なみをつくることができます。

伝統工芸の輪郭をイメージしたフレームの強調や、ベランダや開口部における和風の格子手すりや格子窓の設置により、和の知恵を活かした秩序ある街なみをつくることができます。

ショーウィンドウなどにより1階はもてなしと賑わいのしつらえとすると、効果的です。

軒を揃けると、人のスケール感に合った秩序をつくることができます。

街道に面して小さな緑の空間をつくると、効果的です。

建物のれんを認識すると、和の知恵を活かした賑わいづくりを行うことができます。

3階以上は斜めく軽妙な色彩デザインで空に溶け込ませます。

高さや開口の分割化に
プレームの強調や、扁かたて
和の素材を積極
街道に面した
1階部分の
街なみは2階

■和の街なみを意識した応用の作法

①和の素材から想起されるテーマ色の活用

低層部（1、2階部分）については、大山街道の歴史的建造物などに見られる「白漆喰の白」、「石の灰色」、「土壁の黄土色」、「木の焦げ茶色」、「瓦の鼠色」の中から下記のテーマ色を選定し、基調色と強調色を組み合わせて伝統的な輪組み工法を想起させる配色を行うことにより、街なみを整えることができます。（下図を参照）

なお、原則として、量数形成基準における色彩の基準外の色はアクセントカラーとし、各面の1/5以下まで使用可としますが、色の組み合わせや素材を工夫して良好な色彩デザインとした場合は、1/5を超えて使用できるものとします。

※以下の色彩例のマンセル値は例示です。近似的についてもテーマカラーとして活用してください。

基調色として用いるテーマ色

白漆喰の白 石の灰色 土壁の黄土色

色相例 10YR6/0.5 10YR7/0.5 10YR7/2 2.5YR/1.5 2.5Y7/2 10YR6/4 10YR7/5 2.5Y7/4

※彩度4を超える色彩を用いる場合は、実況のある素材の使用を避けることを推奨します。

強調色として用いるテーマ色

木の焦げ茶色 瓦の鼠色

色相例 5YR3/1 5YR3/1 10YR4/0.5 ~ 10YR6/0.5

※白境界の色に無彩色（N：ニュートラル）はありません。無彩色に近い、白漆喰や瓦の色もわずかに色味を帯びています。

マンセル値の読み方
5YR2/1
色相 彩度

効果的なテーマ色の使い方（伝統的な輪組み工法を想起させる配色）

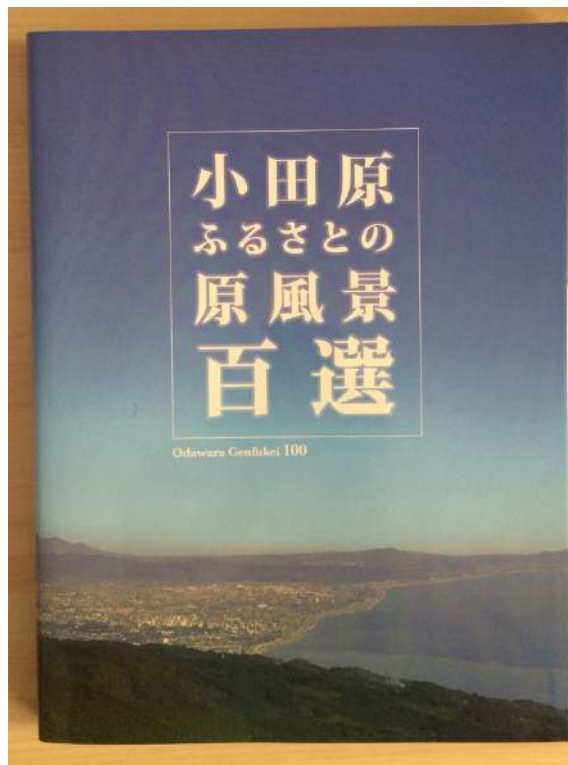
基調色：壁など面になっている部分には基調色を用います。

強調色：柱や格子、窓枠などの面積が狭い部分には強調色を用います。

小田原ふるさと原風景百選

記憶や思い出に残る小田原の身近な風景を見つめ直し、愛着を深めるために平成18年3月に選定された「小田原ふるさとの原風景百選」の選定のしくみづくりや、市民にわかりやすく成果を届けるための冊子やマップづくりに関わりました。

選定にあたって、100箇所の原風景を選ぶのではなく、市民からできるだけ多く（1,237件）の原風景の思い出を集め、それを100のカテゴリーに整理するという手法を取ることで、市民が原風景を自分のものとして実感できるように工夫しました。



書籍として発行した「小田原ふるさと原風景百選」

世田谷区風景づくり計画

「世田谷区風景づくり条例」は、区民主体による風景づくりを1つの柱として捉えており、条例の中の「地域風景資産の選定」という項目について、区民参加の場の運営を通して、地域の風景資源を区民が推薦し、選定された際には、推薦者を中心とした活動グループを立ち上げ風景を保全・活用するという地域風景資産の定義や選定のしくみを検討しました。

平成14年から平成25年度までに3回の区民参加による選定事業が行われ、延べ86箇所が選定されました。

選定後も活動人が集まる情報交換会や講座、ワークショップ、シンポジウムなどを通して、活動のフォローアップを続けています。



地域風景資産の考え方

